

資料紹介

常民文化研究 第二卷(二〇二三)

林勘次郎と「瓦片録」

山本志乃・川島秀一

はじめに

神奈川県日本常民文化研究所の所蔵資料に、「瓦片録」と表題がつけられた書物が二冊ある。著者は林勘次郎といい、島根県浜田浦(浜田市元浜町)の漁師であったとされる。いずれも勘次郎の直筆によるが、一冊は昭和一七(一九四二)年、もう一冊は昭和二七(一九五二)年に書かれている。そしてこの二冊には底本があり、最初にこれが書かれたのは昭和七(一九三二)年であったことが、序文や末尾に記された年月日からうかがえる。

勘次郎はこの二冊を、渋沢敬三に謹呈するために書いたようだ。昭和一七年筆の本には渋沢に宛てた手紙(昭和一七年五月一日付)がつけられており、そこにいきさつがこう書かれている。

私は過年、先生が当地へ御越になりまして浜田女子師範学校へ御立

寄の際御覧になりました「浜田浦瓦片録」を綴りました者で御座います。其時御同行の那賀郡跡市村森脇太一氏に瓦片録の写本を御依頼になりました由。昨年の今頃はが出来上ったが見て呉と私に見せられました処複写式で書かれた同書は多少読みにくい処や又私としても種々訂正増補したい箇所がありますので、是は初め書いた私自身が一部新たに筆で書改めて渋沢先生へおあげしませうと請合ひ昨年六月一日から書き始めました。(句読点筆者)

渋沢が、浜田の女子師範学校に所蔵されていた勘次郎筆による「瓦片録」に目をとめ、同行していた郷土史家の森脇太一にこれの写本を所望したが、事情を聞いた勘次郎が自ら筆をとり、修正を加えて新たに書き起こした、というのがおおよその経緯である。手紙の続きには、書き始めてからほどなく体調を崩し、年を越してようやく完成を見たことがつづられており、丸一年ほどかけた作品であったことがわかる。

この手紙の中で勘次郎は、「漁師の子が漁師であった男の手で何んの参考書も見ず又誰の話も聞かずに唯自らが歩み来った思ひ出の種々を書き綴った魚臭い沙まぢりの味ない覚」と書いている。その言葉のとおり、「瓦片録」は、漁師であった勘次郎が自らの見聞をもとに暮らしの移り変わりを書き留めた貴重な記録であるが、詳細については不明な点が多い。

そこで、二〇二二年度から開始された基盤共同研究「渋沢敬三に関する総合的研究」の一環として同年八月に島根県内で調査を実施したところ、常民研所蔵本以外の「瓦片録」三冊を確認することができた。さらに二〇二三年三月には、国文学研究資料館所蔵の一冊を確認し、これまでに合計六冊の「瓦片録」の所在が明らかになった。本稿ではそれらを紹介し、それぞれの特徴や著者である林勘次郎の人物像、関連する人々など、現時点で判明したことを中間報告としてまとめておきたい。なお執筆にあたっては、「はじめに」と「第一章」は山本志乃が、「第二章」以下「おわりに」までは川島秀一が担当した。

一 「瓦片録」の所在状況

これまでに所在が確認された「瓦片録」六冊について、一覧を表1にまとめた。六冊のうち、著者である林勘次郎の自筆になるものは四冊(①②⑤⑥)あり、このうち①が、昭和七(一九三二)年に書かれた底本と思われる。

表1 「瓦片録」の所在一覧

	表紙の表題	執筆者	年代	所蔵	図版の彩色	備考
①	瓦片録	林勘次郎	1932年	島根大学附属図書館	なし	毛筆、軼入り
②	濱田浦 瓦片録	林勘次郎	1942年	神奈川大学日本常民文化研究所	あり	毛筆、渋沢敬三宛の手紙付き
③	瓦片録	筆写本		島根大学附属図書館	なし	軼入り、カーボン紙による筆写
④	瓦片録	筆写本		国文学研究資料館	なし	カーボン紙による筆写
⑤	瓦片録	林勘次郎	1952年	神奈川大学日本常民文化研究所	あり	ペン書き
⑥	瓦片録	林勘次郎	1952年	浜田市立中央図書館	あり	毛筆、丸川久俊校閲、林勘次郎寄贈

そもそも①がなぜ書かれるに至ったかは、二〇年後の写本である⑤の「後記」にわずかながら記述がある。「我一子が師範学校卒業の際、研究課題として出されたものを、唯、拾ひ集めの綴として一方、商家工場の真相を把握する事は不可能であるからと自分の実践の跡を書き綴って一冊と為し師範学校へ寄贈したのである」とあり、勘次郎の子が師範学校を卒業する際にまとめた研究課題を追捕すべく、自ら体験してきた浜の暮らしを綴りまとめ、同校に寄贈したという。なお、ここにある「師範学校」とは、当時地元の浜田にあった島根県女子師範学校のことである。勘次郎の長女がここに通っていたことから、「我一子」とは長女をさしていると考えられる⁽²⁾。

私家版の郷土資料として著された①が、②から⑥までの写本を生むことになったきっかけは、渋沢敏三の浜田訪問にあった。正確な年月日などの詳細は不明だが、渋沢は昭和一五(一九四〇)年九月に宮本常一と山陰地方を旅しており、その途次で浜田に立ち寄った可能性が考えられる。このときの旅は、島根県邑智郡田所村の田中梅治翁を訪ね、田中翁の著書(一九四一年にアチックミュージ엄彙報として『粒々辛苦 流汗一滴―島根県邑智郡田所村農作覚書―』出版)に関する相談をすることが目的のひとつにあった。そして、田中翁と親しい間柄にあり、渋沢・宮本との仲介役を担っていたのが、先の勘次郎の手紙にも名前が挙がっていた森脇太一であった。

森脇太一(一九〇六―一九七七)は、島根県邑智郡桜江町に生まれ、小学校教員を務めながら民俗、郷土史の研究に従事した。多数の著作があり、なかでも一七七九頁にもなる『邑智郡誌』(一九三七年)は、森脇自身が「私の一生の事業」(『邑智郡誌』の「上梓に際りて」と述べるほどの労力を費やした大著である。田中翁とは、この『邑智郡誌』の編纂を通じて親交を結んだようだ。

宮本は、昭和一四(一九三九)年八月に隠岐で開催された教員の講習会で森脇と出会い、田中翁について情報交換をしている。その年の一〇月にアチックミュージ엄に入所し、十一月には入所後初めての旅で山陰に足を運び田中翁を訪ねた。そして翌年、渋沢を伴って当地を再訪する。現地での同行者には、森脇も含まれていた⁽³⁾。

おそらく渋沢は、このとき森脇を通じて勘次郎の「瓦片録」を目にする機会を得たのだろう。写本を依頼された森脇が、勘次郎にそ

れを見せに来たのが昭和一六年の五月ごろであるから、時期も概ね一致する。

六冊の「瓦片録」のうち、勘次郎とは明らかに筆跡が異なる写本が二冊(③④)ある。いずれもカーボン紙による筆写であり、筆跡も同じであることから、この二冊は森脇太一による筆写本であると考えられる。それぞれの所蔵経緯は不明だが、④は祭魚洞文庫として収蔵されており、渋沢のもとには、勘次郎の自筆本二冊と森脇の筆写本一冊が所蔵されていたことになる。

森脇による筆写本は、ところどころ誤字が斜線で直されていたり、図版がいびつであったりと、勘次郎の自筆本に比べて見劣りがするのは否めない。これを見せられ、東京の渋沢のもとに送ると聞かされた勘次郎が、自ら写本を作成しようと考えたのも無理はないと思われる。とはいえ、森脇とのやりとりは、勘次郎に「瓦片録」の価値を自覚させ、より完成度の高い増補版ともいえる写本を二度にわたって作らせる契機になった。林勘次郎も、田中梅治も、宮本のいう「文字をもつ伝承者」であり、ともすれば埋もれてしまいかねない彼らの作品に光を当て、中央にいる渋沢にその存在を知らしめたのは、森脇太一のような、民俗学や郷土史の研究に強い志を抱く地方在住の研究者たちであった。農山漁民自らが著した生活記録への着目は、アチックミュージ엄を特徴づける活動のひとつだが、それを支えた背景に、根生ともいえる研究者たちのネットワークがあったことは心に留めておくべきであろう。

さて、勘次郎が二度目に渋沢へと謹呈した⑤の「瓦片録」は、②

の謹呈からちようど一〇年後の昭和二七（一九五二）年に書かれた。「後記」には、戦災によってかの「瓦片録」も灰燼に帰したに違はなく、残念なことであるから再度写本を作ってはどうかという森脇の勧めもあって綴り改めたとある。昭和二七年といえ、浜田の師範学校に寄贈してあった底本の①が、同校の廃止により松江の島根大学附属図書館へと移管された年でもある。底本を身近な場所です手に取ることが難しくなるという事情もあって、再度の写本に着手したのかもしれない。

そして、この⑤と同じ昭和二七年の写本は、浜田市立中央図書館にも一冊所蔵されている（⑥）。⑤はペン書き、⑥は毛筆と筆記用具が異なるのに加え、⑥には中扉に「朱筆 丸川久俊先生」と大きく記載があり、各所に朱が入っている。

丸川久俊（一八八二～一九五八）は、浜田市錦町出身の海洋・水産学者で、農林省水産試験場の技師を務め、我が国の海洋調査事業を指導した。世界的な海洋調査に従事し、その過程で日本海の大和堆を発見したことも知られる。昭和一四（一九三九）年に退官後、帰郷して浜田漁協組合長や県水産業会長などを歴任し、戦後は浜田水産高等学校などの設立にも尽力した。勘次郎と丸川との具体的な接点は不明だが、高名な学者である丸川の校閲を経ることにより、「瓦片録」の学術的な価値をより確かなものにしたと考えたのであろうか。

勘次郎はこの写本を、昭和三五（一九六〇）年五月二〇日付で浜田市立図書館（当時）に寄贈している。先述のとおり、かつて浜田

の師範学校へ寄贈した①はすでに地元になく、結果的にこの⑥の写本が、浜田での新たな「底本」として当地に残されることとなった。

二 「瓦片録」の造本構成と異本の変移

それでは次に、「瓦片録」の自家製本のうち、勘次郎が完成本として他所へ寄贈した三冊の書（①・②・⑤）について、その造本構成を比較してみたい（写真1～3）。昭和七（一九三二）年から、ちようど一〇年ごとに作成しているが、一七年本の製作動機が渋沢敬三や森脇太一からの外部からの働きかけがあったものの、勘次郎自身が通算にして三〇年のあいだに、一〇年ごとの作り直しということを意識した、内発的な動機の変化があったものと思われるからである。その三冊の「瓦片録」の造本構成を比較してみたのが、表2である。

興味深い点がいくつか指摘されるが、特徴的なことは、「写本」としての姿勢を崩さず、「序」も「跋」も、その作成年月日も変えずに、そのまま引き継いでいることである。つまり、昭和七年一月二三日から同年の六月三〇日の約五カ月間が「瓦片録」の製作時間であったという情報が、そのまま書き伝えられていることである。

ただし、「序」は、一七年本では「自序」であり、七年本の「濱田浦漁港修築事務所にて」という製作完遂場所も、「濱田浦住」に変えられ、それが二七年版には七年本に戻されている。また、「跋」も一七年本には「結」に、二七年本には「跋」に戻され、同様に、

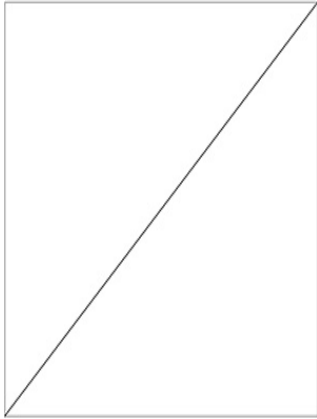


写真1 1932年の自筆本
(鳥根大学附属図書館所蔵)

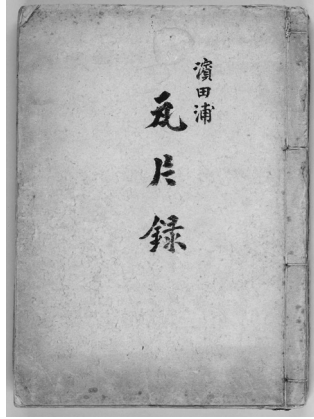


写真2 1942年の自筆本
(日本常民文化研究所所蔵)



写真3 1952年の自筆本
(日本常民文化研究所所蔵)

表2 「瓦片録」の造本構成の変遷

昭和7(1932)年本	昭和17(1942)年本	昭和27(1952)年本
①表紙 ②序(「昭和七年一月二十三日 濱田浦漁港修築事務所にて」) ③「記載標目」(丁数なし) ④本文 ⑤跋(「昭和七年六月三十日 了」) ⑥「濱田浦附近之圖」	①表紙 ②中扉 ③「鳥根縣濱田町全圖」 ④自序(「昭和七年一月二十三日 濱田浦住」) ⑤目次・挿繪目次 ⑥本文 ⑦結(「昭和七年六月三十日 終」) ⑧修正を終えて(「昭和十七年三月六日」) ⑨「新濱田市區域」・「濱田名所案内畧圖」・「濱田案内」・「濱田漁港概要圖」	①表紙 ②口絵(「明治初年頃の浜田鳥瞰図」) ③序(「昭和七年一月二十三日 濱田浦漁港修築事務所にて」) ④目次・挿繪目次 ⑤本文 ⑥跋(「昭和七年六月三十日 了」) ⑦後記(「昭和二十七年十月五日」戦災にて杉戸の仮寓にて) ⑧「漁港修築前の浜田浦」・「修築後」・「濱田漁港概要圖」・「波力計強度曲線(鳥根縣浜田漁港修築事務所昭和四年六月九日検定)」

制作を終えた日付の後の「了」が、一七年本だけは「終」の字を当てている。

三種類の「瓦片録」を比較した上で散見される一七年本の特異性は、その自家製本の作成目的が渋沢敬三(日本常民文化研究所)への謹呈ということにあったことに理由している。その後の二七年本は勘次郎の手近にあった七年本を写すかたちで行われ、七年本と二七年本の共通性はそのためである。

この一七年本だけは、表題の「瓦片録」の頭に「濱田浦」という小さな文字が添えられており、「結」の後に、昭和十七年三月六日の「修正を終えて」が付けられているように、勘次郎にとっては「修正」程度の書き写しの意識が、多分に強かったものと思われる。とくに、造本構成において、大きな修正と思われる点は、本文にページ数を打ち、目次と本文(挿繪)とが簡便に照合させることができるようにしたことである。

その「挿繪」について検討してみると、七年本においては、地図を含めた一六枚が組み込まれており、一枚を除いて、すべて方眼紙の上に書かれている。当初、浜田女子師範学校への寄贈を目的に造った本だけに、報告書の図版にふさわしいも

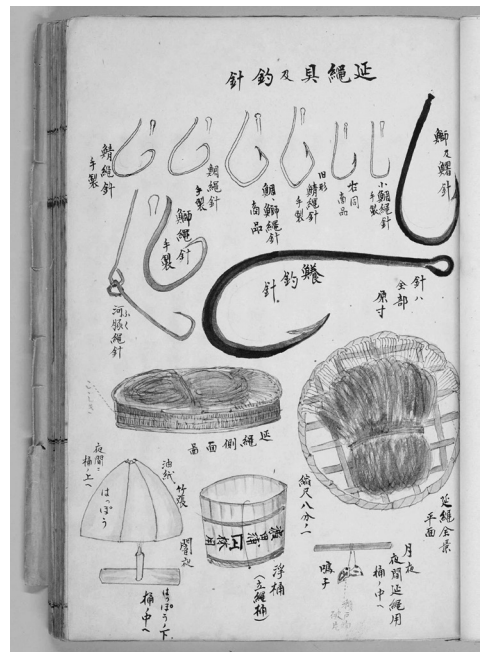


写真4 『瓦片録』(1942年)に描かれた漁具の挿絵(日本常民文化研究所蔵)

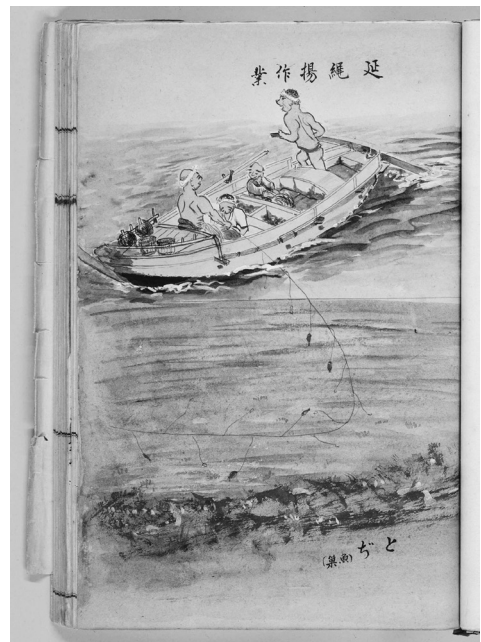


写真5 『瓦片録』(1942年)に描かれた延縄漁の挿絵(日本常民文化研究所蔵)

のであり、「挿絵」よりも「図」に近く、彩色も施していない。ところが一七年本からは、彩色も施され、図でもあるが、より「挿絵」に近く、漁具だけでなく、漁労に関わる人間が描かれている(写真4・5)。本文の「漁撈の一日」(二七年本では「漁師の一日」と「魚市場の一日」、それから二七年本に新たに追加される「浦暦」は、いずれも小説仕立ての、人間の生き生きとした会話の応答の進行によって叙述されているが、それに見合うような、表情のある人間の姿が、ユーモアも交えて描かれている。

次に、本文を挟む前後の図を検討してみると、七年本の末尾に構成されていた「濱田浦附近之圖」は、勘次郎の「修正本」(一七年本)では、本の頭と後尾に二枚に分かれている。つまり、「自序」・

「目次・挿絵目次」・本文・「結」・「修正を終えて」を挟むように、「頭には「島根縣濱田町全圖」が、後尾には、「新濱田市区域」・「濱田名所案内畧圖」・「濱田案内」・「濱田漁港概要圖」が新たに加えられている。島根県那賀郡濱田町は、昭和一五(一九四〇)年に、周辺の石見村・周布村・長浜村・美川村を合併して「濱田市」として発足している。一七年本では、濱田町の地図と濱田市の地図によって前後に本文を挟むことによって、この時間的な流れを図によって意識させながら、一〇年という時間が経過したがゆえに、ますます昭和七年時点の本文の価値が高まることを意図しているような構成になっている。一七年本の表題が「濱田浦 瓦片録」となっているのも、二年前に市域の一部になった濱田浦を、あえて意識化する

ために、「濱田浦」の文字を加えたのではないかと思われる。

一方の二七年本の図では、「明治初年頃之浜田鳥瞰図」という口絵と「漁港修築前の浜田浦」・「修築後」・「浜田漁港概要図」・「波力計強度曲線(島根縣浜田漁港修築事務所 昭和四年六月九日検定)」の四枚に本文が挟まれている。漁港の歴史図を後ろにまとめ、昭和七年時点よりも、さらに古い口絵を本文の前に置くことで、大きな浜田の歴史の中で、この本を浮き上がらせている。昭和七年本から二〇年が経過し、その後記によれば、昭和二十七年一〇月五日に、「震災にて杉戸の假寓にて」製作を終えたことになっている。第二次世界大戦下の浜田の空襲は、昭和二〇(一九四五)年七月二八日、勘次郎も浜田の戦災を目撃し、大きな歴史の激動に揉まれることで、明治以来の浜田の歴史を見つめざるを得ない状況ではなかったかと思われる。なお、海軍の暁部隊を擁していた浜田市では、昭和一九(一九四四)年から、浜田浦一帯の家屋を疎開することになり、勘次郎の家もこのときに取り壊され、市内の杉戸町に間借りの生活を強いられたという。なおさら、昭和七年時点の「瓦片録」の価値を見出していったのではないだろうか。つまり、昭和七年本は、時間が経過すればするほど、勘次郎の中で、その価値を見出していき、書き伝えという伝承の中で、むしろ固定化されていったものと思われる。

林勘次郎の本の作り方の特異性は、この図と共に、「挿絵」(二七年本では「挿畫)である。これらは決して、単に文字によって書かれた内容を補うだけの意味ではなかったと思われる、勘次郎の視覚

化する情動については、彼の他の自家製本についても、見ていかなければならないだろう。⁽⁵⁾

三 「瓦片録」以外の自家製本

林勘次郎の「瓦片録」以外の自家製本は、その五冊が現在、浜田市立中央図書館に所蔵されているが、「瓦片録」のような、それらの写本は見当たらない。それらを製作順に並べると、以下のとおりである。

- ① 「茶製圖繪」(昭和二十五年一月)
- ② 「浜田変遷図繪」(昭和二十五年三月)
- ③ 「紙漉重宝記 全」(昭和二十六年五月)
- ④ 「海幸譜」(昭和二十六年六月)
- ⑤ 「浜田地方方言訛語録」(昭和二十六年九月)

「茶製圖繪」と「海幸譜」は、それぞれ『茶製の図』と『水産動植物圖説』という原本がある絵を模写したものである。「紙漉重宝記 全」は、同名の大正一四(一九二五)年、大阪の堀越寿助による識語のある書を文字と挿入図と共に写した自家製本である。元来は寛政一〇(一七九八)年、國東治兵衛選・靖中庵桃溪画として浪花書林から発行されたもので、勘次郎は、大正一四年の書をさらに写し替えており、挿入写真も、手書きで描いている。写本という行為が、自家製本にするための一種の読書であったことを明らかにしているような自家製本である。「浜田変遷図繪」は、横長の見開

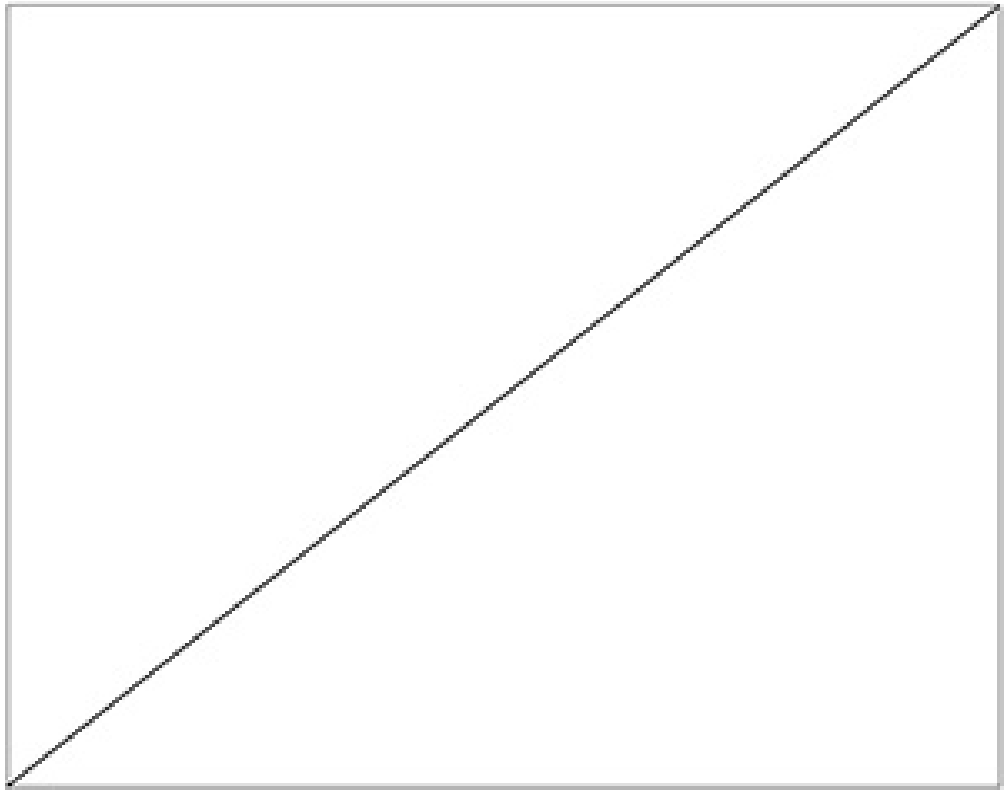


写真 6 (右) 「浜田変遷図絵」より「昭和十八年九月二十日風水害記」(浜田市立中央図書館所蔵)

きに沿って、右側に年表などの歴史記述、左側に右側の歴史主題に合わせた浜田市の地図を描いた本である。「浜田地方方言訛語録」は、〈標準語〉(東京方言)と浜田の方言を縦書きで対応させた定型的な方言集である。魚類だけでなく、名詞・動詞・形容詞・助動詞・接続詞までに至る、浜田地方の方言を編んだ本である。以上の自家製本は、いずれも戦後の昭和二年から二六年にかけての製作で、翌年の「瓦片録」の二七年本へ続く、本作りに勢いのあった時期であったと思われるが、五冊のうち四冊が絵や図を主張している書である。ここでは主に、「浜田変遷図絵」と「海幸譜」を中心に、その本作りの実態を見ておきたい。

「浜田変遷図絵」は、「序」によると、昭和二五年の三月に書き始め、同月の二五日に脱稿、二九日には浜田市に寄贈している。おそらく、「浜田変遷図絵」は、昭和二五年の製作であることから、浜田市の市制一〇周年を意識して作成したものと思われる。市へそのまま寄贈したことから理解されよう。浜田市立中央図書館所蔵本には、「温故知新」と、当時の岡本俊人市長が揮毫している。「変遷図絵」であることから地図を中心とした本ではあるが、前述したように、見開きの右頁の文字記述と左頁の地図とが対応している造本構成を採っている。たとえば右頁の「昭和十八年九月二十日風水害記」は、左側では「昭和十八年九月二十日風水害周布地区最大増水時の浸水量」という標題のもと、罫線のない簡略化した表と、浸水図とが書かれ

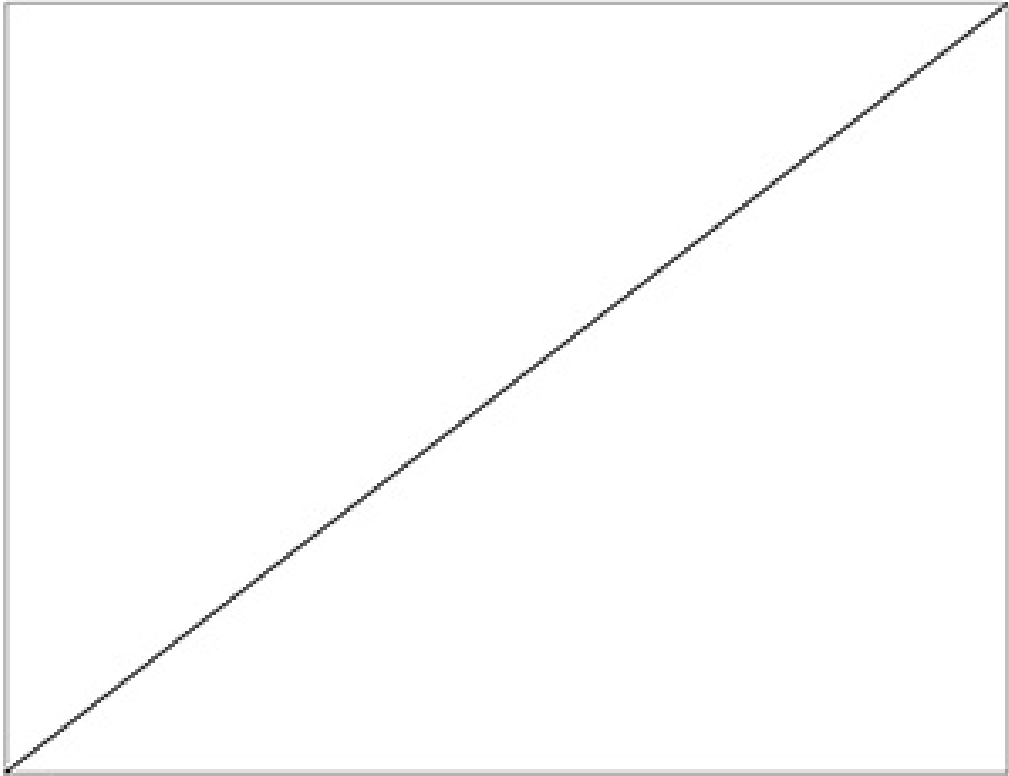


写真6(左)「浜田変遷図絵」より「昭和十八年九月二十日風水害 周布地区最大増水時の浸水量」(浜田市立中央図書館所蔵)

ている(写真6)。このような地図が、この本には二〇枚が使用されている。いわば、この「図絵」は、歴史的な事象を時間と空間の両面から捉えようとした自家製本で、勘次郎の際立った認識の方法と思われる。

また、「海幸譜」は、次のような「序」と「後記」とから成る。

(序)

海幸の濱田魚類においても大体一定して居るもその名稱が時代とともに變遷してゆきつゝある。そこで其の形に依って其の名を知り置くことも無為ではあるまいかと茲に原圖をまねて素人繪ながら鮫類以下百五十肴と是が地方名とを識すも素より誰に見せようとして書いたものでもない手すさびのまゝに

昭和二十六年六月 林 勘次郎 識

(後記)

田中茂穂分擔大地書院發刊水産動植物圖説一冊を濱田漁業組合より借りて書寫すこと四十日百六十七鮫類、鱈、はぎ、ふく類、鰈、いか等は全部書寫し三島鰯等は名稱について鮠、赤鯮とともに當地方色の附記をだし、海象、海鱸については父より聞いた海の話も記載の参考繪として思ふて書いたのであるが是等は又の機會に綴ることゝして一應締切つて見たが、不馴且素要(ママ)の無い繪圖寫真を見ての書寫の困難時に

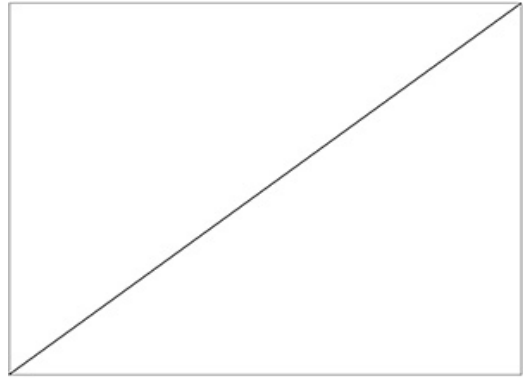


写真7 「海幸譜」に描かれたアカムツ (浜田市立中央図書館所蔵)

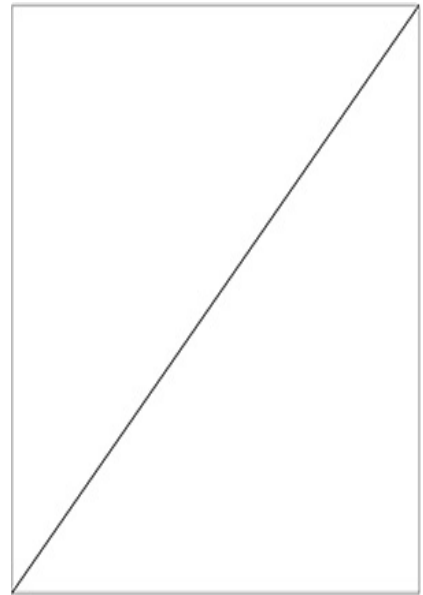


写真8 「海幸譜」に描かれたアシカ (浜田市立中央図書館所蔵)

倦怠あり探索あり粗略入念自紙面に現れ稚拙も窺はれることである
 が自分の勉強として人生の意義として八十頁を書き終わる

昭和二十六年六月二十三日

濱田浦黒川杉戸假寓にて 林勘次郎

「序」によると、この本を作る動機は、魚類名が時代と共に変遷してゆき、新しい世代が分からなくなるといふ危惧から生じたものらしい。この本作りの動機は、勘次郎のほかの本作りにも共通する点である。

一方の「後記」によれば、「海幸譜」は、大地書院刊の『水産動

植物圖説』掲載の写真からの模写であること、その模写に四〇日をかけ、一六七種の魚類を書き写したことが記されている。『水産動植物圖説』は、田中茂穂などによって昭和八(一九三三)年に出版された書で、副題に「有用・有害・鑑賞」とあり、別名『有用・有害・鑑賞 水産動植物圖説』と呼ばれている。抽出して書かれた魚はサメ・エイ・ハギ・フグ・カレイ・イカなどに、アラヤアカムツと共に、ミシマオコゼの地名も付したことが書いてある。ミシマオコゼに触れたのは、おそらく渋沢敬三が「ミシマオコゼの問題」⁽⁶⁾などを、すでに書かれており、この魚名について、渋沢がことさら関心があったことを意識しての文面であつたらうと思われる。本書での地名は、一般名の脇に赤字で書かれている(写真7)。

また、「後記」では、セイウチやアシカなど「父より聞いた海の話」として、自身が見聞したことのない生物も採り上げていることも記している(写真8)。かつては、これらの生物が浜田沖にも見られたものか、あるいは勘次郎の父親が浜田以外に出漁をしたときにでも見たものかは不明である。その「海幸譜」の製作姿勢は、「瓦片録」のそれにも共通するものがある。たとえば、昭和一七年五月一日付けの渋沢宛て勘次郎の書簡によると、「是(「瓦片録」

のこと)を浦の古老に尋ねたり何かの参考書を見て書き改めたなら多少物の益にも立つ本になりはすまいかとも思いましたが……と書いているように、「瓦片録」の製作姿勢として、わが身の体験ばかりでなく、多くの体験者の言葉や書籍を引用して、本自体の客観的な価値を高めようとしていたことは事実である。若干ではあるが「浜田鏡」(瓦二九四頁)⁽⁷⁾や「浜田風土記」(瓦二九五頁)からの引用が見られることから、それは分かる。

それでは次に、「瓦片録」自体が他者へ与えた影響について、その享受の仕方と共に整理しておきたい。

四 「瓦片録」の享受形態

浜田市中央図書館に所蔵されていた筆写本の「瓦片録」が、はじめて活字化されたのは、部分的ではあるが、石見郷土研究懇話会の機関誌、『郷土石見』第二四集からである。これらを「浜田浦の漁民習俗」という標題で七回に分けて採り上げたのは、児島俊平(一九二八)であった。同じ号に「資料」として掲載された、児島の「漁師・林勘次郎のこと」によると、「草稿を『郷土石見』に掲載するに当っては、漢字はできるだけはぶき、文も現代的に読み易く、わかり易いように訂正した」とある。児島が活字化した「瓦片録」は、浜田市立中央図書館(当時は浜田市立図書館)蔵の草稿(⑥)である。それらは、一九九〇年代の前半に、次のような順番で活字化されていた。

「浜田浦の漁民習俗―浦暦(1)―」『郷土石見』第二四号(一九九〇・三・一)

「浜田浦の漁民習俗―浦暦(2)―」『郷土石見』第二五号(一九九〇・八・一)

「浜田浦の漁民習俗(3)―漁師の1日―」『郷土石見』第二六号(一九九一・三・一)

「浜田浦の漁民習俗(4)―問屋・魚市場―」『郷土石見』第二八号(一九九一・一二・一)

「浜田浦の漁民習俗(5)―漁船の変遷―」『郷土石見』第二九号(一九九二・四・一)

「浜田浦の漁民習俗(6)―海産物製造・缶詰―」『郷土石見』第三二号(一九九三・四・一)

「浜田浦の漁民習俗(7)―漁具と漁法―」『郷土石見』第三五号(一九九四・四・一)

このうち「浦暦」は、石見の年中行事に相当する部分、「浦暦(2)」と、「漁師の1日」、「問屋・魚市場」(「瓦片録」では「魚市場の1日」)は、「瓦片録」の中でも小説仕立てになっている記述の部分で、カギカッコにより実際の文字化された声を通した会話形式に表記されている。つまり児島は、「瓦片録」の中でも、親しみやすいところから紹介したと思われる。ただ、皮肉なことに、初めて活字化された「瓦片録」の「浦暦」は、二七年本になって初めて登場した部分であり、それ以前には書かれていない新しい文章である。また、それは浜田に近いところに育った児島自身の「瓦片録」に対

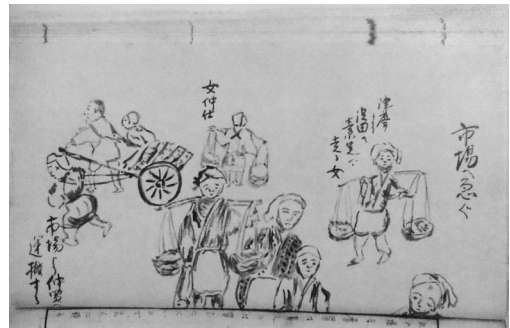


写真9 『郷土石見』に写された挿絵の原図（日本常民文化研究所所蔵）

する、次のような感懐から、あえて引用されたものと思われる。

漁撈作業や年中行事などの記述を読み進むうちに、私は自分が育った仁万漁村（遼摩郡仁摩町）の当時の情景がオーバerrラップして思い出され、タイムカプセルの中に埋没して行く思いであった。それは漁民でないと語れない漁村生活の実態を克明に、かつ写実的に描写しているからである。

また、「浜田浦の漁民習俗」の当初は、図版ではなく二葉の写真を挿入している。それぞれ「大歳神社境内より三階山を望む（山頂

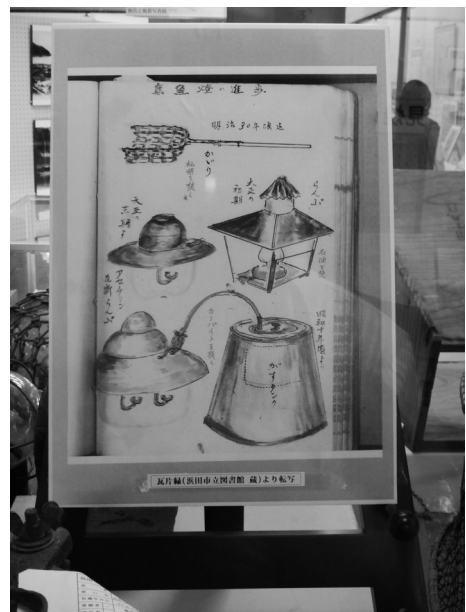


写真10 浜田市浜田郷土資料館の展示に転載された「瓦片録」の挿絵（2022.8.27）

は、関係写真だけでなく、地図も挿入している。

これらの紹介された「瓦片録」の採録資料のうち「浦暦（1）」は、やがて児島俊平の単著『山陰地方漁業史話』（二〇一〇）¹⁰に組み込まれるが、「浦暦」と共に初出時の写真二葉と、「漁師・林勘次郎のこと」も併せて編集されている。

児島が「浜田浦の漁民習俗」を通して、ほぼ毎回、掲載されることになったのが図版であったように、「瓦片録」の魅力は、偏にこの「図版」である。その後、田辺悟は『磯』（二〇一四）の中で、昭和七年版「瓦片録」の「磯見漁」の図版を採用し、それに関する本文の引用を四頁に渡って紹介している。「瓦片録」の図版は、浜

には三階神社がある」と「大歳神社（漁民の氏神）」というキャプションのある写真である。「浦暦（2）」では、「漁港修築前の浜田浦（昭和初年）」という説明のある古写真が用いられ、同号では「漁夫の着物」という説明書きで「瓦片録」からの図版の模写を用いている。その後は、第二八号を除いて、すべて、このような模写された図版が一枚以上、挿入されている（写真9）。

また、「瓦片録」で参考になっている『浜田かがみ』（瓦片録では「濱田鏡」）の書誌情報も記している。「浦暦（2）」で

田市浜田郷土資料館の展示の捕捉資料としても使用された。とくに、「令和四年度常設展 第二次浜田の歴史展 併設コーナー展」の「みなと浜田の漁具と風景写真展」明治・大正・昭和」(会期二〇二二年七月一日〜八月三二日)において、顕著であった(写真10)。

さて、児島は「漁師・林勘次郎のこと」で、あえて「漁師」として捉え、先にも引用したように「漁民でない」と語れない漁村生活の実態」を記した人物として光を当てた。しかし、同じ勘次郎の紹介文を読むかぎり、その経歴は「漁師」だけに還元できない生活史を得ている。最後の章では「瓦片録」の本文から読めるかぎりの林勘次郎像を描いておきたい。

五 本文からうかがわれる林勘次郎像

児島俊平の「漁師・林勘次郎のこと」によると、勘次郎の生没年は、明治二五(一八九二)年に生まれ、昭和四二(一九六七)年に没している。浜田でも藩政時代からの漁村、浜田浦中小路(浜田市元浜町)に生まれている。それまでは家業の漁業を携わっていたと思われるが、三〇歳代後半(一九二七)に町内の缶詰工場に勤務をはじめ、「瓦片録」を書く昭和七(一九三二)年頃は「浜田港修築事務所」に勤めている。⁽¹²⁾「瓦片録」の図版に浜田港に関するものが多いのは、そのためである。

「瓦片録」にも、「筆者が実際に製造して来た其の工場を誌して一例とする」(瓦三八五頁)とあるから、漁業から缶詰加工、そして事

務員までの履歴の持ち主である。確かに、本文中にも「(漁師は「美作の方の山」だろうと云うけれど、実は出雲奥部の仁多、飯石郡の猿政、大万木、琴引山等である)」(瓦一五四頁)など、漁師の認識のありかたを対象化している文章もある。この自分の体験も含めて、対象化しようとする動機は、「瓦片録」という類のない書を生み出した原動力でもあったろう。

しかし、勘次郎が漁業者であったことも確か⁽¹³⁾で、浜田の漁業の特徴として、「網漁の罾網・釣漁の延縄漁業」(瓦七六頁)と、「対馬行」と呼ばれる出稼ぎ漁業や、それに伴う「西借」や「西の金」(瓦三三二頁)という用語を紹介している。対馬への出漁は、大正時代のまごころまで続いたもので、「旧盆が終ると翌年の旧正月の直前まで大部分漁師は長崎県の対馬へ漁に出かけた」⁽¹⁴⁾という。二〜三トくらい帆船に六人が一組になって乗組んだというが、この対馬への出漁が漁師にとって大きな収入源であったという。

さらに、勘次郎が根っからの漁師であったことの証左として、彼の認識の仕方と精神性的特徴について、「瓦片録」の表現法と、記された内容からいくつか指摘しておきたい。

まず、その表現法において指摘できるのは、次のような自然の描写であり、刻々と変化する空や光の色彩の描写である。

① 朝午前中は東の空から地山の方の空、研ぎ上げたやうな青味のひかた(北寄の東風)特有の空が午後遅くなると北風になる。(濱一五七〜一五八頁)

②カブセ(撒き餌)は紺色の海の底へとチラリチラリと白く光って沈み消へて行く。(瓦九二頁)

③陽は西海に沈み、夕焼の空を洋々たる海の面に染め、舷を打つ漣の音さえも無い秋の夕暮。茜の色も次第に暗味かゝる頃だ。(瓦一一五頁)

④何は多忙でも、孫へ「くらが」を渡す船頭のニコニコ顔に、午後の日差しが赫く照る」(瓦一七二頁)

③の「くらが」とは、船上に持って行く弁当箱のことで、それに孫の土産として魚の身などを入れて持って帰る。これらの色彩感の濃厚な表現は、「漁民でないと言えない漁村生活の実態」(児島俊平「漁師・林勘次郎のこと」)を読者に感じさせると共に、漁師の視覚にとって色彩とは、①の事例のように、風向や風力などの気象を予測する際や、②のような実際の操業においても必要な捉えかたの要素であった。そのような体験に根ざした、生業に必要な認識方法であったのであり、単に美文を装ったものではないであろう。

また、以下のように、魚類に対して、あたかも人格をもった生物のような表現をしている箇所がある。

①鱧の先生一尋も潜ったら「左様なら！」をきめこまれるのだ。(濱三五頁)

②鮑を採って彼が餌を沢山に食って居る時は、海の荒れる前兆である。餌は「海草」、鮑は蛸に捕へられて喰われる。その場合蛸は

鮑に馬乗りとなり脚を拡げて鮑の側孔(呼水孔)を閉塞致せしめ礁から離れた鮑の肉を喰らふ。蛸坊主、仲々の横着者である。(瓦二二一〜二二二頁)

これらの表現も、漁師特有の表現法であると思われるのは、自分たちが捕獲する魚に対して、以上のように、人間の行動のように表現することによって、その魚の性質を的確に掴むことができるからである。

漁師たちが自分たちの捕獲する魚類などに対して語り、認識しようとする言葉は、全国にわたって共通するものがある。たとえば、福島県新地町の刺網漁の漁師は、ヤドカリが網にかかるころにはアカジカレイ(マガレイ)もかかることから、ヤドカリが背負う貝殻にはゴカイが入っていて、これを食べるアカジカレイがそのことを知っているからだなどと語る。ヤドカリには動く道があり、「あの人たちも知っている」と、カレイのことを「あの人たち」と呼んでいる。¹⁵⁾魚を「あの人たち」と呼ぶことは、あくまで比喻に違いないかもしいのだが、魚自体にも意志があり、人間の力では手に負えないことをも表現していると思われる。魚類を「水産資源」とのみ捉え、人間が管理できるものとする考えとは異質なものである。人間が魚を捕りつくしてしまうことと、人間が魚を保護し、管理できるものと考えられることは、背中合わせの同じ発想である。¹⁶⁾それは「瓦片録」からも読み取れることであり、たとえば、「人間の心は奇を好む、偶然を欲すると云ふことが出来る。人は平穩の幸福を知ら



写真11 林勘次郎の墓(浜田市原町・十念寺、2023.8.22)。昭和31年建立の石灯籠型の生前墓であり、「歩道林勘次郎の墓」と記している。

ない」(瓦一五八頁)などの表現は、漁に対する偶然の喜びこそ、漁師の生きがいであることを端的に述べている。また、次のような表現にも、つながるものではないだろうか。

実習こそ、生きた学問である。実習に出たならば、海と取り組み大いに失策もし、大胆な研究も行い、魚鱗にまみれ、潮を呑んでこそ人を指導し、研究発展のできる漁業者となり得るのである。しかるに従来の学徒の目的は、水産のお役人さんに成るのが目的で、箸の先で魚を釣り、机の前で鯨を捕るといふ。根本から頭の位置が違っている。(瓦一九一〜一九二頁)

そのような漁師のありかた、そのものを活写している、いくつか

の記述を並べておこう。

① 陸上の人からは不審に思はれるが風には必ず姿がある。(濱八三頁)

② 漁師は屢々独り言云ったり、腹藏の無い話に花を咲かすものである。(瓦一二三頁)

③ 仕事の無い時は、他所の軒下へ立って、沖を見ながら、漁の自慢や、若い時の嘸、自慢珍談等。他の者が問ふに委せて、何も隠すところもなく、得意になって話すが、話は独言の様で、聞く者は、是れに主を置いて居ないから、外から関連の無い話が出て来て、話題は他に移る。用事を思ひ出しては、何んの挨拶も無い、鳥が棟から出る様に、飄然と去来する。(瓦一八六頁)

これらの記述は、漁師と共に暮らしたなかで掬い上げられ、描かれたものばかりである。とくに、漁師の独り言や漁の自慢話が好きなこと、腹藏なく言葉に出す特徴などは、船上での操業で、魚の発見や危険の察知に速やかに言葉を発して、乗船者に伝えなければならぬことが、オカでの生活でも踏襲している感がある。「瓦片録」の内容の検討から、日本の漁師の日常性が、いくらでも見出されていくことだろう。

おわりに

本稿では、日本常民文化研究所所蔵の林勘次郎の記した「瓦片録」の、勘次郎の出身の島根県も含めた、合計六冊の散逸していた異本の所蔵確認と整理を、当初のねらいとした。その作業により、勘次郎の自筆本四冊と森脇太一による筆写本二冊が判明したわけだが、さらに、自筆本の造本構成の変化や、勘次郎作成のほかの自筆本（自家製本）などから、その特異性を述べてきた。

しかし、この多くの「瓦片録」を把握するに伴い、「本」を造ることや「本」を写すということが、現在とは違った識字環境や意味合いであったことを考察することなしには、その全貌を捉えられないことも知らされた。森脇を機縁として、渋沢敬三へ進呈するためには作られた一七年本は、私たちが今、考えている「原稿」ではなく、表紙や目次、挿絵なども組み込まれた「本」そのものである。つまり、活版文化にはそぐわない形で渋沢へ贈られてきたわけであった。渋沢に激励されて原稿を書き始めた、広島を進藤松司（一九〇七〜九三）や秋田の吉田三郎（一九〇五〜七九）とは、また別な歩みを始めた勘次郎も、文字をもつ伝承者の一人であった。渋沢と機縁を結んだ経緯も違うこともあるが、「瓦片録」が結局、活字化されず日本常民文化研究所に眠り続けることになったのは、この「本」を手にとったときの渋沢のとまどいに起因するよう思われる。しかし、「瓦片録」の内容は、けっして進藤の『安藝三津漁民手記』

（一九三七）や、吉田の『男鹿寒風山麓農民手記』（一九三五）に遜色のないものを伝えている。

以上のようなことを考えると、勘次郎の本作りの背景には、出版文化のようなものが想定されていなかったように思われる。渋沢敬三とか、浜田市長や浜田市民など、限定された読者を設定してはいるが、必ずしも広く読んでもらいたいという願いは、それほど強くなかったようである。また勘次郎にとって「読書」とは、本を写すことであり、その書を自家葉籠中のものにするためには、写本を作り、自分の所蔵にすることであった。とくに勘次郎の画才は、写真も含めた図絵を丹念に写すことによって育まれたものと思われる。

この「本」というものに対する捉えかたが、「瓦片録」の内容と共に、今後も考え続けなければならない課題の一つと思われる。

勘次郎は七年本の「序」に、自分の書く言葉に対して「喩へて云へば濱田浦臭い瓦片だから郷土室に止めて置こう」と記し、「瓦片録」という書名の理由の一端を述べている。浜田地方でも「石州瓦」と呼ばれる赤瓦の生産が行われている一方で、それとは別に土中からは多くの石瓦が発見されている。二七年本のみに描かれている表紙の絵は、その考古学的な発掘から得た「軒丸瓦」や「軒平瓦」の碎片である。「瓦片録」という書名は、自分の書く言葉を、発掘されたその瓦片に例える謙虚な表現であると共に、それは同時に、郷土室に留めるべき歴史的価値のある言葉であるという自負が表現された書名とも窺われる。勘次郎にとっては『瓦片録』という書名は、自己韜晦とうかいとも思われる表現であって、浜田町内の「浦分うらぶん」

と呼ばれる漁師集落において、当時は無縁と思われていた文字世界を著した書を作ることに大きな作成動機があったものと思われる¹⁷⁾。その碎片は集めるにつれ、ジグソーパズルのように、浜田の一時期の漁村の姿の全体像をありありと目に見えるように現していくと共に、その碎片の集めかたなどの、「本作り」のありかたに対しても、十分な研究価値が広がっていく対象の「書」だと思われる。

注

- (1) 島根県女子師範学校は、大正一二(一九二三)年四月、今市(出雲市)にあった女子師範を移転して開校。昭和一八(一九四三)年四月、新制「島根師範学校」の発足に伴い同校の女子部となり、昭和二四(一九四九)年五月の国立学校設置法により島根大学が設置されてからは、同校教育学部に包摂された島根大学島根師範学校の浜田分校(通称、石見出身の男子学生も入学)となった。①の「瓦片録」は、島根大学島根師範学校が昭和二六(一九五一)年三月に廃止されたことにより、島根大学附属図書館に所蔵されたと考えられる(受け入れ年月日は昭和二七年五月三一日)。
- (2) 浜田浦に隣接する浜田市大辻町在住の佐藤茂樹氏(昭和二三年生まれ)より聞き書き(二〇二三年八月二二日)。
- (3) 宮本と森脇の出会いや郷土史家としての森脇の人柄などは、田中翁のことを記した宮本の「文字をもつ伝承者(一)」「『忘れられた日本人』所収)に詳しい。同書に、昭和一五年の山陰の旅で森脇が同行していたことが書かれている。

- (4) 児島俊平「漁師・林勘次郎のこと」『郷土石見』第二四号(石見郷土研究懇話会、一九九〇)七三頁。浜田市内で勘次郎の旧宅の近所に暮らしていた元浜町の杉本祥太郎氏(昭和一〇年生まれ)によると、勘次郎は率先して解体計画に協力したが、予定地の解体が完了間近かに終戦を迎えたという。

- (5) 注2の佐藤茂樹氏は、勘次郎の自家製本を評して、勘次郎を「目の人」と称している。

- (6) 渋沢敬三「ミシマオコゼの問題」(後に『日本魚名の研究』「角川書店、一九五九」に収録)

- (7) 「瓦片録」の頁数は二七年本に従った場合は「瓦く頁」、一七年本に従ったときは「濱く頁」と表記した。

- (8) 注4と同じ。七四頁
注4と同じ。七〇頁

- (9) 児島俊平『山陰地方漁業史話』(石見郷土研究懇話会、二〇一一)
- (10) 田辺悟『磯(もの)と人間の文化史一六四』(法政大学出版局、二〇一四)三四八〜三五二頁

- (11) 注4と同じ。七〇頁

- (12) 注4の杉本祥太郎さんによると、勘次郎はがっちりとした体格の方だと伝えている。

- (13) 浜田市誌編纂委員会編『浜田市誌 下巻』(浜田市、一九七三)七二〇頁

- (14) 福島県相馬郡新地町大戸浜の小野春雄さん(昭和二七年生まれ)より聞き書き。

- (15) 漁師がどのように捕獲対象である魚類を認識しているか、ということ

とについて、かつて「漁師の語りに出会うー沖や海底の出来事を語ることー」(『村山民俗』第二〇「村山民俗学会、二〇〇六」四〇八頁)の中でも扱ったことがある。しかし、その折は「擬人法」などという言葉で、表現方法のようなところに留まってしまった感がある。谷川健一も『神・人間・動物ー伝承を生きる世界』(平凡社、一九七五)のなかで、生物との「親和力」という言葉を用いているが、それは漁業などの生業の現場から見出したものではないので、その「親和力」の内実を深めることは今後の課題としておきたい。

(17) 注2の佐藤茂樹氏によると、佐藤氏の父親は、勘次郎のことを「あのおじいさんは学者で偉いんだよ」と言っていたという。

付記

本稿をまとめるにあたり、浜田市の鍵本俊朗氏、佐藤茂樹氏、杉本祥太郎氏、十念寺、浜田市教育委員会、浜田市立中央図書館、浜田市浜田郷土資料館、島根大学附属図書館(松江市)の方々にお世話になりました。ここに記し、感謝の意とさせていただきます。

参考文献

兄島俊平

1990 「漁師・林勘次郎のこと」『郷土石見』第二四号 石見郷土研究

懇話会

兄島俊平

2011 『山陰地方漁業史話』石見郷土研究懇話会

島根県大百科事典編集委員会編

1982 『島根県大百科事典 下』山陰中央新報社

渋沢敬三

1959 『日本魚名の研究』角川書店

島根大学開学三十周年史編集委員会編

1981 『島根大学史』島根大学

浜田市誌編纂委員会編

1973 『浜田市誌 下巻』浜田市

宮本常一

1984 『忘れられた日本人』岩波文庫

森脇太一編・発行

1937 『邑智郡誌』